

ぐろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十五年六月一日発行（毎月一回一日発行）  
第二十卷二号（通巻第三三〇号）

鈴



ぐろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第230号

6. 2013

学園都市

品川 鈴子

新聞社車寄せにて著菘低頭

筑波郡薙ぎ黒龍天昇る

触角のぎんぎら乾び鴉の贅

十字架のイエスさながら鴉の贅



鴉の贅バツハの受難曲聞ゆ  
裏鬼門避けて擡げるまむし草  
検針員守宮は追はず目で逃がす  
円らかを嗜むまま古い紅の花  
老いてより艶濃くなれり紅の花  
紅花の歳は黄系の見本帳



# 玉

# 鈴

# 吟

愛媛 藤田宣子

卒寿なる余生の為に接木せり  
蛞蝓の卵水晶玉に似る  
膨らみを日毎見定む桃の花  
土塊を叩き腰のす日永なり  
新バイク八十路の母へ日のうらら

兵庫 史 あかり

春塵は開かずの間にも忍び込む  
春泥に躊躇の小犬抱き跳ぶ  
研ぎ減りの出刃もてさばく桜鯛  
連弾に阿吽の呼吸あたたかし  
春雷にあらず隕石落下する

兵庫 古井公代

甕るに山動けりと幼言ふ  
見目の好き野良猫の子は独り立ち  
あたたかや畑のポンプを胸で漕ぎ  
留守電にしてとりかかるといかなご煮  
チューリップ嫁と本音の会話増え

大阪 古林田鶴子

寒蛭身じろぐ音の秘めやかに  
佗助の垣根の先きの開かず門  
菜園の端は折れ伏す葱の場所  
初物の菜の花に先づ絵の具とく  
菜の花も食べるにをしき蕾あり

香川 細川知子

一幅の雛を拜見お席入り  
女紋背中に一つ春障子  
お点前の手先惑はす花粉症  
尺差しに母の名薄れ針供養  
大試験済みて渋谷へ原宿へ

兵庫 細野恵久

枝わたる懸巢ひそやか梅雨の入  
一旦は鳥を追へり親燕  
四十雀スピーチスピーチとは言へど  
どちらかと言へばドイツ語ほととぎす  
愚直たり夏鶯と調律師

愛媛 松井洋子

遅き日のゆつくり回る観覧車  
のどけしや新任巡查愛想良し  
嬰やつと寝付けば春の昼静か  
よちよちの仔犬撥ね上ぐ春の泥  
春の昼仔犬のシャンプー選り迷ふ

埼玉 松木清川

それなりに孫大人びて卒業す  
岩風呂に古葉降り注ぐ竹の秋  
老梅忌 古本漁り数千歩  
今一回買ふか灯油を春寒し  
木の芽味噌香り広がる口一杯

東京 松本アイ

角巻に被われ唄を背で聞く  
門衛の如くに睨む雪だるま  
鳥雲に六方ふみつつ降りる幕  
初午や東北復興願う幡  
風の中囃の意味も楽しかり

愛媛 松本恒子

毛氈に忘れて行きしつくしんぼ  
相違え堀に傾く松と梅  
夫の椅子昭和の軌み春灯す  
人なりの狡さがちらり涅槃西風  
忘れ潮辛苦の呆果ての磯かまど

兵庫 三枝邦光

春塵の届かぬ湖上鳶の舞  
七輪の目刺にくらき海の蒼  
梢まで木の芽明りに大銀杏  
春の雨蛇の目女人の先斗町  
海蝕の灯台岬黄たんぼ

兵庫 水野 範子

失明の友の口へと冷菓そつと  
あたたかや豚おとなしく波止の荷に  
退院の荷を下萌に立ち話  
囀に目覚め降り立つ病みあがり  
あたたかき妣の名一字俳号に

兵庫 水野 弘

春日浴び猫足伸ばし大欠伸  
教え子の古稀祝う会春夕べ  
春の旅唄話しの絶え間なし  
庭弄り指に残りし春の傷  
散歩する賑わう声に春明ける

香川 三橋早苗

脳壊れ言葉手繰れず山笑ふ  
病室の眠れぬままに朝霞  
窓枠の大きさを切る霾の空  
病室にまつすぐ伸びるチューリップ  
退院し旧暦こそは雛祭り

愛媛 三浦澄江

スキージャンプ警点越ゆる十六才  
とろとろと母の夢見る涅槃西風  
紅をひく未だ老いられず木瓜の花  
世は飽食生きて八十路の豌豆まく  
梅日和古き時計のねじを巻く

茨城 三輪慶子

隠し事なしとは云はず石鹼玉  
青饅や云ひにくき事丸く云ひ  
門院の通ひし古道木の芽風  
木の芽晴肩を並べて孫と行く  
やはらかき紙にくるまる桜貝

埼玉 向江醇子

一人居の春の光のまだ弱し  
春浅し薄きを選ぶ供花の色  
紅白のあられ浮べて雛の宵  
半分を花菜に埋む道しるべ  
春の風他国の悪さ運びくる

兵庫 村田とくみ

子ら去にて寒雀らのすべり台  
叔父の葬裾を端折りて雪の道  
寄せ植糸の赤藍黄花雪のせて  
小柄な手握り加減の大根選る  
母逝きて閉せし茶室石路の花

大阪 師岡洋子

立春の日ざしに開く旅の地図  
靴紐を結ぶ手がのび土筆折る  
踏青の果てて脈打つ土ふまず  
欄干をおどけ歩きの春鴉  
寝る前に見廻る厨春の雷

東京 安田とし子

付き合ひは素顔が宜し桃の花  
死に方の話におよび桜餅  
初雷のたちまち遠くなりけり  
ふらここを一心に漕ぐ富士額  
春疾風水掛け不動に水逸れて

埼玉 梁瀬照恵

裸木となりて樹林に風透る  
水中歩行背骨に冬日ガラス越し  
白壁の日溜りを背に毛糸編む  
享保雛の絵葉書き飾り桃かざる  
今朝の陽に土手青み初む散歩道

香川 横内かよこ

伝説の先輩となり卒業す  
突き放すべき時もあり剪定す  
女子大へ向かふ坂道ひなあられ  
雛の膳ランチタイムは主婦ばかり  
徒党組みおのこやつつけ雛の日

大阪 吉田和子

町寺で写経・コーラス春隣り  
街角でコロツケほうばる春の旅  
なら町に一刀彫りの雛飾り  
俄農法蓮草みな啄まる  
悴け猫二羽の鳥に突つかかる

大阪 吉田光子

渋滞の堀川通り北は雪  
着せ綿の頭巾も厚き地藏菩薩  
撫牛も子を抱きよせて余寒顔  
堂囲む釘抜絵馬に余寒風  
受験子で真昼の電車活気づき

兵庫 明石文子

啓蟄や埴輪工場登り窯  
梅開く何時もどおりの手術前  
術前に合格の報せ兄弟  
桜時女ばかりの夕餉かな  
さくらよりアーモンドの花大きくて

兵庫 荒木治代

春愁やほんのり甘いオブラート  
倅せに過ぎ来て脆し桃の花  
刺繍糸さし継ぐ五彩風光る  
床の間に並ぶ賀のもの婚の春  
やはらかくもの言ふ人とみて温し

大阪 居内真澄

仏壇の扉閉ざして雛の間に  
置き去りの雛九十才目と目合ふ  
春の夜に暫し黙ある電話時差  
オスプレイ霾る故郷低飛行  
隣国のミサイル云々花宴

大阪 池田かよ

春雷や猫は薄目をあけしのみ  
風光る陽気な友のイヤリング  
補聴器へ集まる総て春の音  
海苔鍋と云ふもてなしの島泊り  
ベレー帽ふり向くおぼる亡夫ならん

兵庫 池田久恵

目をみない人と一緒に木の芽和  
木戸銭はお任せの寄席梅見あと  
長・短のフルートの音すみれ咲く  
春の雪みきり発車の我がいる  
めだたずにヒマラヤ桜楚楚と咲く

大阪 石橋萬里

日脚伸び針一本に家捜しす  
教頭がひとり耕す学習田  
蓬生の陪塚簾傾ぎたる  
春の雪出窓に凭れシヨパン聴く  
春疾風雀斜めに跳び上がる

# 鈴の奏

品川鈴子選

農水路盛り上がりゆく春の水 香川 吉井 潤

分け入りて猿と出くわす梅見行  
春なかば声囁らすほど友笑う

初雷に呼ばれ本より戻りたり

雪霏々と四辺をとざす独りつきり 山口 山本 敏子

いつの間にわが散歩道名草枯る

解けかけて又凍りゆく雪達磨

寒雀陽溜りさがし落着かず 兵庫 先山 実子

春炬燵話し上手と聞き上手

診察券ばかりが増えて春遅し

ドラマ見つついうたた寝の春の夜

穏やかな歳重ねたし傘寿春 兵庫 四葉 允子

淡雪に児は顔上げて声あげて

尖塔に春の光がモダン寺

春浅し長き線香関帝廟

春の空廃材燃やす湯屋煙

寒戻り昔闇市高架下 兵庫 大西 和子

シーボルト寄りし宮なり梅見ごろ

香炉灰篩にかける彼岸前

春座敷狼籍者のランドセル

蛤をかうて往復七千歩 埼玉 松岡悠喜夫

ビルの壁伝ひ歩いて春一番

啓蟄や児童菜園畝曲り

春草井の頭自愛文化園にかくれ鈴鳴ひとつがひ

齒科ロビー玩具一杯日ざしのぶ 兵庫 水上 貞子

梅一輪耳鳴りせずに眺めけり

満開の辛夷の下で鬼ごっこ

チュウチュウと指を吸う児梅満開

窓うらら猫のうたた寝髭動く 兵庫 坊野貴代美

賓頭盧を撫でる指先風光る

啓蟄の境内往き来百度踏む

山笑ふ老犬乗せし乳母車

残されしボトルシップに冴え返る 兵庫 片山八重子

老人会段雛飾り児と遊ぶ

囀を耳に遊ばせ千手仏

一人旅始める女の春帽子



# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句 十句 岩田 登美子 //

\*選句は全て 品川鈴子

初雷に呼ばれ本より戻りたり

吉井 潤

春炬燵話し上手と聞き上手

先山 実子

雷はいつの季節にも発生する気象現象だが、季語としては最も多い夏になっている。

しかし立春後初めての雷を「初雷」と言い、地中から虫の這い出す啓蟄に「虫出しの雷」とも呼ぶ頃のは、微妙に柔らかな語感。

好きな本を読み耽りながら、天意の囁きを、耳に止め本の世界から我にふと還るひととき。

解けかけて又凍りゆく雪達磨

山本 敏子

大きな雪達磨がでんと据わっている雪国では、永の寒さに籠ってひたすら春を待つ。雪達磨の相好が少し和らぎ人々もほっとしたが、翌日からまた寒戻り、解けかけの崩れ達磨は睨みの効かぬ表情のまま凍て付いた。冬將軍の置土産は奇妙な顔で居座り、なかなかの頑固者。

春炬燵は足腰から適度に温いので、身も心もほぐされて、用が出来ても離れがたいもの。今日の話相手は互いに気心が通じ、相手をたてて会話は切もなく弾む。春炬燵ならではの醍醐味。

春の空廢材燃やす湯屋煙

四葉 允子

長閑でやわらかな空に太い煙突からもくもく煙が立ち上っている。大抵の銭湯は午後三時から開く。湯屋の空地に積んである廢材で湯を沸かしているのでしょう。私も昔、銭湯通いをしたことがある。カランの前で身体を洗っているとたつぷりと石鹼をつけた糸瓜たわしで級友が背中を流してくれたことを思い出した。下町のなつかしい風景。

シーボルト寄りし宮なり梅見ごろ 大西 和子

鎖国時代の日本でドイツ医師シーボルトはオランダ商館医として開業の後医学教育も行った。博物・動物・生物学で日本の自然も研究しており、長崎から江戸への道中がこの神社にも立寄った。その由緒ある神社は今梅の見頃である。もしこの時季であったなら、彼も香しい梅花を存分に楽しんだであろう。

ビルの壁伝ひ歩いて春一番 松岡悠喜夫

春一番とは二月末から三月初めにかけて吹く春嵐の一つである。今日は是が非でも外出しなければならぬ。砂も捲き入れた強い風に向って歩くと息が出来なくなり飛ばされそうである。風の抵抗を少なくしてビルの側面にへばりつき少しずつ前へ進む。突然の春のおとずれのしるしは嬉しいがちよつと迷惑。

歯科ロビー玩具一杯日ざしのぶ 水上 貞子

歯科医院と言うとあの歯を削る音を思い出し足が向かない。まして幼児には最も嫌な処であるが、歯科医も工夫し

て児の喜びそうなおもちゃをあれこれ備えておく。評判の良い歯科医院は、予約時間が過ぎても待たされる。ロビーには児が遊んだままになっているおもちゃに窓から日差しが射し込んでいる。作者は忙しい家事から逃れて春を感じているひととき。

山笑ふ老犬乗せし乳母車 坊野貴代美

ふとすれ違った乳母車の中には嬰兒ではなく老犬がおさまっていた。犬は散歩が大好き。老いても萎えた足でよたよた歩こうとする。途中で座り込んでしまう時もある。この飼主は愛犬を少しでも楽しませようと慣れ親しんだ散歩道を乳母車で連れ歩く。家族同様の愛犬介護も大変ですね。

一人旅始める女の春帽子 片山八重子

春うらら、気儘な一人旅はどこへお出掛けになったのでしょうか。お気に入りのファッション、それに合せた春帽子、おしゃれも楽しんでおられる。作者のご年令を拝見しますとお元気でとても羨ましく思いました。若さの秘訣は行動力にあるのですね。澆刺とした心踊るお句。